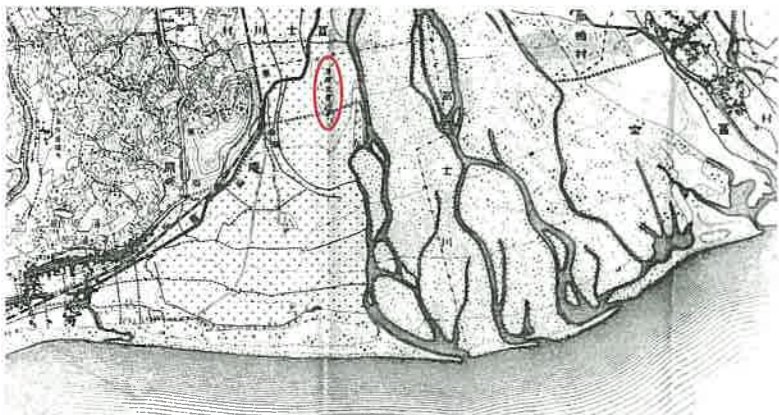


# 安政東海地震

阪神淡路大震災や東日本大震災を目の当たりにして、今、最も関心が注がれているのは、地震と津波の被害なのではないでしょうか。嘉永7年（1854）11月4日に発生した安政東海地震の生々しい様子や被害等を、伝法村田端の住人だった伊藤鍊次郎が『手記』にまとめています。

鍊次郎の家は半壊となり、南の方角の家は、すり鉢を伏せたように潰れ、その隣の家も同様に両家の敷地の境にある井戸水が3m余りも高く水を噴き上げました。このほか伝法村の田端や中桁では、地震により長さ1.8m～2.7mほど地面が裂け、割れ目の幅は大きい所は30cm、小さい所は13cm～16.5cm位、深さは約90cm～120cmほどの所がありました。厚原で発見された安政東海地震のものと思われる断層の写真が裏面の地図に掲載されています。



明治20年測図 2万5千分の1 地形図「蒲原」から

安政東海地震により、富士川流域の土地の隆起や陥没が非常に激しく、地形が大きく変わったことを鍊次郎も記録している。現在は確認できなくなりましたが、明治20年測図の地形図には「蒲原地震山」と図示されている。



蒲原地震山「目で見る庵原の歴史」から

この隆起や陥没の影響で、富士川の流路が東よりに変化したため、森島や宮下などの富士川河口近くの村々は洪水に悩まされるようになった。なお、対岸の松岡にも水神社南側付近に松岡地震山が生じたといわれている。

## 津波（高潮）の記憶

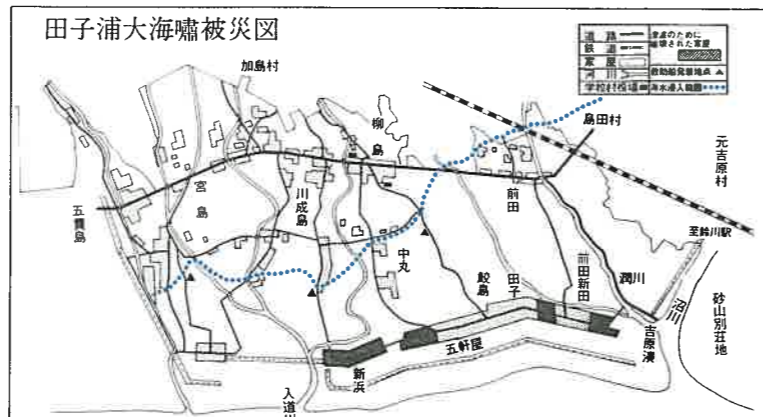
現在、津波といえば地震などともなって海底が急変することにより起こる巨大な海水の塊の動きであり、高潮は台風や発達した低気圧が海岸部を通過する際に生じる海面の高まりを指しますが、昭和初期くらいまでは厳密に区別されていませんでした。富士の歴史を振り返ると、大きな地震津波の被害記録は今のところ発見されていません。しかし、高潮と思われる大きな災害はいくつか見られます。



延宝8年（1680）中吉原宿の高潮被害状況

江戸時代前期、東海道の宿場・吉原宿が壊滅的な被害を受け、移転を強いられた高潮災害が起こった。この記録は、当時の吉原宿の住人が記した『田子の古道』という地誌に詳しく書かれており、これをもとに当時の被害の様子を上に表示した。現在の海岸線から3km以上離れた原田（海拔13.2m）や比奈（海拔7.4m）など根方街道辺りまで家財道具が流れ着いていたことがわかる。

ちなみに吉原宿は、江戸時代に2回移転しており、この時被害を受けたのは中吉原宿と呼ばれる。移転の後、現在の吉原本町通りの地で幕末まで宿場の運営を行った。



田子浦海嘯被災図

明治32年（1899）10月7日に起きた「田子浦海嘯」と呼ばれる高潮災害は、台風の影響によるもので、田子浦村一帯や元吉原村など、海岸部の村々が大きな被害を受けた。この時の記録は、当時の田子浦小学校長・鈴木七四郎が『田子浦海嘯始末』にまとめており、上の図はその被災状況である。

東海道本線では、鈴川駅（現吉原駅）が冠水し、その西側に向けて潤井川と交差するあたりまで海水が侵入したことがわかる。海水は、海拔3m～5m、海岸線から1km前後の地点に及び、田子浦村だけでも55人の死者が出ており、犠牲者を悼んで鮫島の林正寺に海嘯碑（裏面参照）が建てられている。



## 富士の災害史 概要版

富士山の麓に暮らした富士市の先人たちは、富士山の噴火や富士川の洪水、地震や高潮など、さまざまな災害を体験してきました。過去の災害の歴史を知ることによって、今を生きる私たちは防災の知恵を授かることができます。このパンフレットは、冊子版『過去に学ぶ～富士の災害史』とタイアップし、視覚的にわかりやすく富士の災害の歴史をまとめたものです。冊子版とともに、防災教育にお役立ていただければ幸いです。

## 宝永の富士山噴火

宝永4年（1707）11月23日、富士山頂の南東側から激しい噴火が始まり、16日間にわたって続きました。これは10月4日に宝永地震が起こってからわずか49日後のことでした。この宝永の噴火により出現したのが宝永山です。噴火による溶岩流の流出はほとんどありませんでしたが、火山性地震の揺れと空高く火山弾や火山灰を噴き上げる大爆発が続きました。この噴火は、御厨地方（現御殿場市や小山町）に大きな被害を与えました。東麓の須走では噴火の噴出物が厚さ3m、御殿場でも1m近くに達したといいます。高く噴き上げられた火山灰は東方に運ばれ、江戸にまで至りました。

吉原宿の宿役人が幕府に提出した書類によると、10月4日の地震で多数の家屋が半壊したところへ、11月22日から30回ほど地震があり、家々が倒壊、富士山の鳴動が23日午前10時から始まって富士郡中へ響き渡り、人々は皆動揺していたが死者は出ず、山腹から夥しい煙が巻きだし富士郡中を覆いつくし、昼は煙だけに見えたが夜になると火柱が見えたことなどが記されています。噴火口が東麓だった上に、偏西風の影響などにより噴出物が東へ運ばれたことから、富士市域の大きな被害は記録されていません。



宝永四年富士山噴火絵図（個人蔵） 静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供

この絵図は原宿（現沼津市）問屋場の書役（宿場業務の記録係）が描いたもの。噴火の夜の様子が「噴火の始まり頃は爆発音も大きく、人家の戸はめ（羽目板）は音を立てていた。原宿へ石や砂が降ったのは一度だけであり、噴火の翌日の11月24日の午前4時頃であった。毎晩、稲光りのように光り、伊豆の天城山付近まで一面に明るくなった。」と書かれており、原宿の被害が少なかったことや噴火時に発生する閃光の様子などがわかる。



# 今に伝わる災害のあしあとマップ


**宝永4年(1707) 宝永地震**

①  ② 

**白鳥山の崩落と地震墓(富士宮市内房)**  
宝永地震により白鳥山が崩落し、その土砂は富士川をふさいで対岸の長貫村にまで達した。白鳥山は安政東海地震でも崩壊し、宝永地震、安政東海地震などの犠牲者を悼んで、内房の橋上地区に地震墓が建てられている。

**正月の餅の禁忌**

**桑崎の山火事 平成13年(2001)**  
桑崎や鶴無ヶ淵といった赤淵川上流の地域では、正月に餅をつくると火事になるという戒めが伝わる。こうした戒めは、水を得にくい山間部に多く伝わる。



**嘉永7年(1854) 安政東海地震**

③  ④ 


**河内の大石(静岡市清水区)**  
この石は安政東海地震時に、集落の西側の真富士山から崩落し、翌年の大雨による土石流で現在地に流れ着いたと伝えられている。高さ19m、周囲の長さは60mある。現在は安産石として信仰を集める。

**断層(厚原)**  
川窪遺跡の発掘調査で発見された断層。

**富士川の洪水とのたたかい**

⑤ 

**現在の雁堤**  
江戸初期に雁堤が築かれ、富士川の治水が進むと、加島平野には次々と新しい村が開かれ、水田地帯を形成した。暴れる水を治める一方で、水田に必要な用水路網をめぐらせ、米づくりにかけてきた先人の苦闘の歴史を、築堤から300年余り経つ雁堤は今に伝える。

⑥  ⑦ 

**宮下山神社と境内の水難記念碑**  
明治43年(1910)8月の富士川の堤防決壊は、宮下の田畑約35haが河原のようになり、流失半壊した家屋が25軒に及んだ大災害だったが、宮下の人々は村で最も高所であるこの山神社境内に逃げて無事だったという。境内の周囲は石垣で固められ、上空から見ると、その敷地は大井川流域の舟形屋敷(舟形の形態をとることによって洪水・氾濫から敷地を守る)のように、富士川上流側にある奥宮が船先、鳥居が艦になる舟形の形状をしている。



**嘉永7年(1854) 安政東海地震**

⑧ 

**ディアナ号乗組員救助団(富士市立博物館)**  
地震発生から数週間後、三軒屋の浜にロシアの軍艦が漂着した。船から脱出する乗組員のために、地元の人々は決死の救助活動を行い、約500人の命を救った。また、代官の命令により、近隣の村が炊き出しを行っている。

⑨ 

**不盡河帰郷堤之碑(松岡・水神社)**  
安政東海地震により富士川の西岸の地盤は隆起し、東岸は沈下したことにより、富士川は東寄りに流れるようになった。地震の翌年の安政2年(1855)から4年にかけて、大水による大規模な堤防の決壊が続き、廃村となる村もあった。富士川東岸の松岡水神社に建つこの碑は、安政5年(1858)帰郷堤完成の際に建てられ、暴れ川富士川との闘いが刻まれている。帰郷堤は、強固な岩盤の上に建つ水神社南側から下流にかけて築かれた。


**明治32年(1899) 田子浦海嘯**

⑩  ⑪ 


**海嘯碑(鮫島・林正寺)** 田子浦海嘯については、裏面参照。

**後世に伝えられた災害の記憶**




**富士塚(三平塚)**  
富士塚は、富士山の登拝者が海岸で身を清めて浜の玉石を積み上げ、登山の安全を祈願したと考えられている。一方、地元では三平塚とも呼ばれ、昔、津波が押し寄せて家が流されたり家財道具を失ったりして苦しんでいる時、鈴川村の豪農三平という者が、米を提供する代わりに浜から小石を運ばせ、小山を築かせたとの伝承もある。富士塚の参道は、かつての潮除け堤防でもある。

⑬ 

**いのち塚(山ノ神古墳)**  
山ノ神古墳と、その西方の庚申塚古墳は、昔からこのあたりでは少し小高い森となっていた。昔、大津波があったとき、柏原の人たちはこの二つの小高い森に逃げ込んで助かったため、柏原の人々にいのち塚と呼ばれてきたという。

⑭ 

**延宝8年(1680) 大津波(高潮)**

⑮  ⑯  ⑰ 

**中吉原宿遺跡出土陶磁器**

**左富士神社(当時は悪王子の森)と義隄記碑**  
江戸時代の延宝8年(1680)の大津波(高潮)の際、4艘の船に140~150人が乗り込んで、悪王子の森に避難したと『田子の古道』に記されている。裏面参照。境内には、この時の被害の様子が記された義隄記碑が、宝暦5年(1755)に建立されている。

**昭和41年(1966) 台風26号**

⑫ 

**台風26号遭難者慰霊碑(大野新田)**  
9月25日の台風26号による被害者の慰霊碑。

**浮島ヶ原の開拓**


⑬ 

**冠水して泥海となった浮島沼周辺の惨状『浮島ヶ原開拓史』から**  
上流から下流の高低差が少なく、排水能力の低い沼川は、時に海水の逆流を招き、浮島沼一帯は湖のようになった。

⑰ 

**完成した石水門 明治18年(1885)**

『目で見える富士市の歴史』から  
海水の逆流を防ぐ目的で吉原湊口に建造された石水門は、田子の浦港が整備されるまでその役割を果たし、昭和41年(1966)に解体された。

⑱ 

**昭和放水路**  
幕末に築かれたスイホシという放水路と同じ位置に、昭和17年(1942)、昭和放水路がつくられた。これにより、沼の排水能力が高まり、耕作しやすい土地に発展していった。